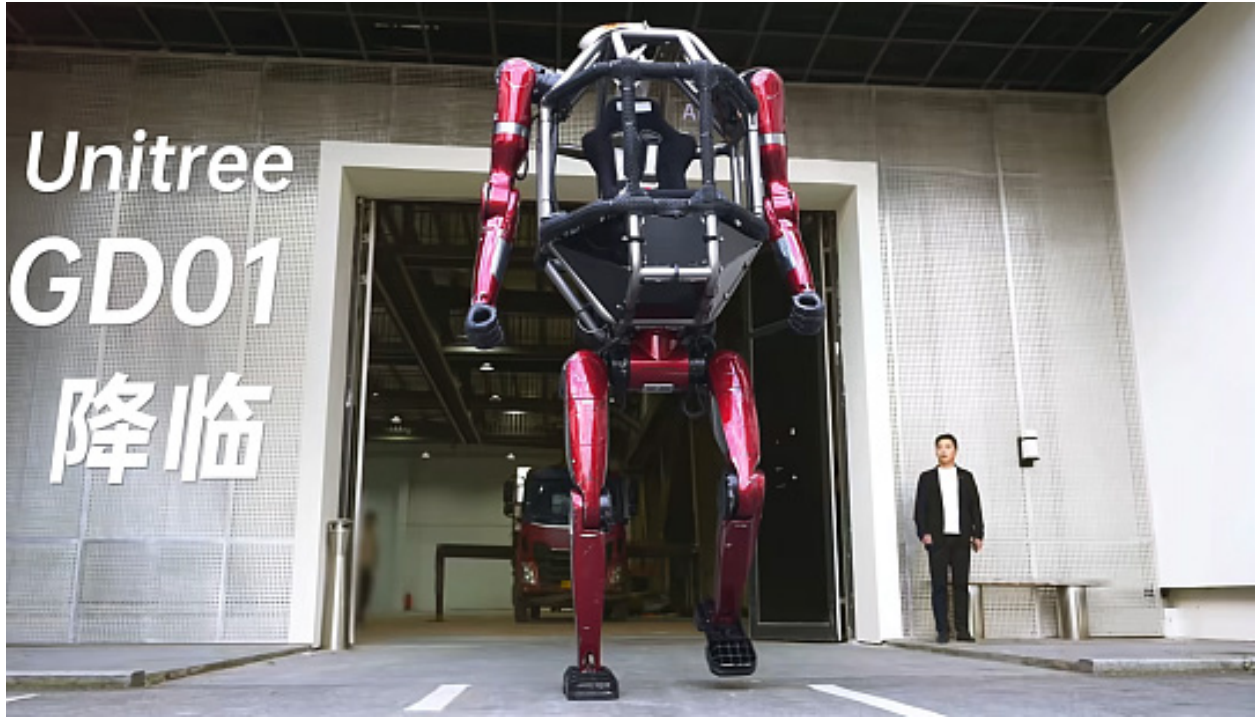


Unitreeが世界初の量産型「人が乗れる変形ロボ」GD01を発表！
中国発・硬派テクノロジーの最前線

上海デスク 浅野 潤



1. SF ロマンが現実になった！

2026年5月12日、ロボット開発の世界的大手スタートアップである「Unitree (宇樹科技)」が、とんでもないプロダクトを発表しました。なんと、世界初となる量産型の人に乗れる変形ロボット(搭乗型メカ)「GD01」です！

気になるお値段は 390 万人民币元 (日本円で約 8,000 万円以上)から。サイズは高さ約 3メートル、重さ 500 キロという超ビッグスケール。

しかもこれ、アニメの世界のように「二足歩行モード」と「四足歩行モード」を自由に変形できちゃうんです。

実際に人が乗り込んで歩くのはもちろん、壁をドカンと突き破るほどのパンチ力も健在。これを見てピンとくる映画ファンも多いのではないのでしょうか。そう、名作 SF 映画『エイリアン 2』で、シガニー・ウィーバー演じるリプリーが、凶悪なエイリアン・クイーンと戦うために乗り込んだ黄色い重機型メカ「パワーローダー」です！あの時、スクリーン越しに「カッコいい！乗ってみたい！」と誰もが憧れた SF の未来が、ついに現実のものとして僕たちの前に姿を現したのです。

今回は、この最新ロボットの魅力と、その裏にある大マジなビジネス戦略について、分かりやすく紐解いていきます。

2. ここがスゴイ！ GD01 の技術的な見どころ

「どうせ展示用のハリボテでしょ？」と思ったら大間違い。この GD01 は、実際に人が乗ってガシガシ動かせる「量産モデル」として作られています。注目したいポイントは大きく 3 つあります。

ロマンあふれる変形機構

見晴らしがよくて色々な作業ができる「二足歩行」と、デコボコ道でも絶対に倒れない安定感抜群の「四足歩行」を、状況に合わせてスムーズに切り替えられます。これまでのロボットには真似できない、圧倒的な環境適応力を持っています。

驚異の「9割自社開発」

ロボットの筋肉にあたる関節モーターや、それを動かすシステム、さらには力の入れ具合をコントロールする高度なアルゴリズムまで、90%以上が Unitree の自作です。だからこそ、巨体でありながら滑らかに動き、ここぞという時に爆発的なパワーを発揮できます。

乗る人の安全もしっかりガード

500 キロの鉄の塊に人間が乗るわけですから、安全対策もガチです。ちょっとやそっとの衝撃ではビクともしない、頑丈な設計になっています。

3. 誰が買うの？気になる市場のターゲット

さすがに 8,000 万円超えのロボットなので、気軽に買える一般向け商品ではありません。主に想定されているのは、以下のような企業向けのビジネス(B2B)シーンです。

1. エンタメ・テーマパーク：SF 系の遊園地のアトラクションや、映画・ドラマの撮影でリアルな機体として使う。
2. 特殊な危険現場：人間がそのまま入るには危ない災害地域や、重機と人間のチームワークが必要な現場。専門家の間でも「これで大儲けしよう！」というよりは、Unitree の技術力を世界に見せつけるための「広告塔(フラッグシップ)」という意味合いが強いと見られています。

4. 業界への大衝撃！ 日本との対比で見える「異次元のスピード感」

今回の発表は、中国のテック業界において「ついにここまで来たか！」と大きな話題になっています。これまでの「他国のマネ」や「パーツの組み立て」というイメージを完全にぶち壊し、独自の技術で世界の最先端に躍り出た証拠だからです。一部の専門家は、スマホの歴史をガラリと変えた「iPhone の登場 (iPhone モーメント)」に例えて大絶賛しています。

ここで面白いのが、ロボット大国である「日本」とのアプローチの違いです。日本といえば、かつて HONDA の「ASIMO」が二足歩行の金字塔を打ち立て、アートやベンチャーの分野でも水道橋重工の「クラタス」やツバメインダストリの「アーカックス」といった、ロマンあふれる搭乗型ロボットを生み出してきました。しかし、日本の開発が「オーダーメイドの芸術品」や「一品限りの実証実験」にとどまりがちだったのに対し、今回の Unitree は最初から「価格をつけて量産化する」という、圧倒的な商業ベースで仕掛けてきたのが決定的な違いです。日本の精緻な職人技に対し、中国は「まず形にして市場に出す」という爆速のスピード感と資本力で勝負を挑んできた形になります。

しかも、発表のタイミングがまた絶妙です。実は Unitree、現在中国のハイテク向け株式市場(科创板)への上場(IPO)を目指している真っ最中。直近のデータによると、2025年の売上高は17億人民元(約350億円)を超えていて、なんと人型ロボットの世界シェアは1位なんです。今回の GD01 のド派手なデビューは、投資家たちに向けて「うちの技術力は本物ですよ！」とアピールする、最高の追い風になっています。

5. 現実的な壁：これからの課題とリスク

夢が広がる GD01 ですが、お祭り騒ぎの裏には、これからクリアすべき現実的なハードルもたくさんあります。

高すぎるコスト

やっぱり 8,000 万円は高いですよ。買った企業がそれ以上の利益を出せる使い道(コスパ)が、現状ではまだ限られています。

法律やルールの空白

こんな大きなロボットが公道を走っていいのか、操縦するにはどんな免許がいるのかなど、法律が全く追いついていません。

主力製品へのフィードバック

GD01 そのものはすぐには普及しなくても、この開発で得た「超強力なモーター」や「賢い制御システム」の技術を、今売れている四足歩行ロボットや人型ロボットにうまく応用(反哺)できるかどうか、ビジネス的な成功の鍵を握っています。



6. まとめ：SFの世界が、すぐそこに

実用性やコストの面で「本当に必要なの？」という厳しい声があるのも事実です。しかし、SF映画の中でしか見られなかった世界を、実際に形にして売ってしまう Unitree の実行力には脱帽するしかありません。

間違いなく、これからの最先端テクノロジー(ハードテック)の新しいモノサシになるでしょう。上場を経てさらにパワーアップした Unitree が、このロボット技術をどう僕たちの生活に落とし込んでくれるのか、これからの展開が本当に楽しみです！

記事参考：宇樹科技オフィシャルサイト
写真引用：宇樹科技オフィシャル微博

ひょうご海外ビジネスセンターは、世界10カ所に海外展開現地相談窓口として「ひょうご国際ビジネスサポートデスク」を設置しています。本通信は、毎月1回、各デスクから寄せられる現地トピックスを順にお届けするものです。

【発行 公益財団法人ひょうご産業活性化センター ひょうご海外ビジネスセンター】